

栗山ジャパン 3年間の集大成へ



いよいよオリンピック出場をかけた大一番が始まる。選手はもちろん、栗山雅倫監督にとってもこの3年間準備してきたことをすべて発揮する場だ。長いようで短かった3年を振り返りつつ、指揮官がアジア予選への思いを語った。

2012年に日本女子代表監督に就任した栗山雅倫監督に課せられた最大の目標が、「オリンピック出場」だった。2020年の東京オリンピックを前にして、東京への大事な布石となる大舞台。気持ちが高ぶらないわけがない。

ここまでの3年を「平坦ではなかったけど、いろいろなことができた」と栗山監督は振り返る。

じつは、栗山監督は就任してからすぐに3年間の強化計画を立てていた。

就任当初から「トータルモビリティ

ィー」を掲げ、攻守で機動力あふれる展開をめざしてきた。攻撃では幅を使った大きな展開から間を狙い、守備ではアグレッシブな6:ODFを身につけてきた。とくにDFは世界からも注目をあびるほどだった。世界と戦えるという自信をつける期間、若手を積極的に起用し、チーム全体の幅を広げる期間と、当初に計画したとおりことは進んでいた。

しかし、ここ1年は「辛酸をなめた時期」（栗山監督）になった。10月の仁川アジア大会、今年3月のアジア選手権（インドネシア）で宿敵の韓国に3連敗。しかも3試合とも10点以上の差がついた。批判にさらされる苦しい時期だったが、「それでも次のステージを見据えながら練習をしてきた」（栗山監督）。

また、韓国だけでなく中国、カザフスタンにも警戒を怠らない。（2カ国は）侮れないけど、ここまでずっと勝っているのは明確なアドバンテージ。危機感を持ち、試合に勝利し、韓国への挑戦権を得たい」と栗山監督。

こうした思いは選手たちも同じ

手応え充分のヨーロッパ遠征

8月4日から18日の日程で、日本女子代表がヨーロッパ遠征を行なった。今回の行き先は6月に続きハンガリーと、デンマークの2カ国。

ハンガリーでは、強豪ハンガリー代表と2試合戦った。初戦は差をつけられたが、翌日の2戦目はきっちり修正。敗れはしたものの、「攻撃に粘りが出てきた」（栗山監督）。また、遠征メンバー全員を起用できたのも大きかった。

デンマークではプライベートカップに参加。各国のクラブチームと戦い、1勝1分1敗で大会を終えた。ドイツのブクステフェデとの戦いは、28-21と点差とともに内容もよく、スタッフ、選手たちには自信になった。

また、恒例になっている合同練習では、さすがに選手たちは慣れたようすを見せ、ほかのチームの選手たちと積極的にコミュニケーションを図った。栗山監督は「今回の遠征は収穫が多く、ステップアップができた」と手応え充分。オリンピック予選に向けて自信を深めた遠征となった。



プライベートカップで戦ったニューコビンのメンバーとの一枚（写真はチーム提供）

日本代表

29-20

ブダオロス
(ハンガリー)

【得点者】9点：角南、5点：横嶋（か）・松村、3点：原、2点：永田・池原、1点：本多・田中・塩田

ハンガリー代表

34-18

日本代表

【得点者】4点：本多、3点：横嶋（か）・角南・原、2点：横嶋（彩）・松村、1点：川村

ハンガリー代表

27-19

日本代表

【得点者】4点：横嶋（か）、3点：角南・塩田・松村、2点：池原、1点：田中・東濱・原・永田

日本代表

26-26

ハール
(スウェーデン)

【得点者】5点：松村、4点：角南、3点：田中・横嶋（彩）・東濱、2点：原・川村、1点：本多・横嶋（か）・池原

日本代表

28-21

ブクステフェデ
(ドイツ)

【得点者】7点：角南、6点：松村、4点：横嶋（彩）、3点：塩田、2点：本多・横嶋（か）、1点：田中・東濱・原・相澤

ニューコビン
(デンマーク)

27-23

日本代表

【得点者】5点：松村、4点：田中、3点：横嶋（彩）・角南、2点：東濱・池原・塩田、1点：本多・横嶋（か）

【参加メンバー】藤間かおり、白石さと、東濱裕子、永田しおり、相澤莉乃（オムロン）、飛田季実子、本多恵、田中美音子、錦織新、川村杏奈（ソニーセミコンダクタ）、石野実加子、横嶋かおる、横嶋彩、角南唯、塩田沙代（北國銀行）、松村杏里（広島メイプルレッズ）、原希美、池原綾香（三重バイオレットアイリス）、カメタニ・サクラ（ヴァイパー・クリスチャンセン／ノルウェー）



スタッフと一丸になってオリンピック予選へ

で、まずはほかの国に勝利することが大切になってくる。そこから最終日の韓国との一騎打ちへ。

オリンピック行きのチケットを手にするには韓国に勝たなければならない。今夏のヨーロッパ遠征で得た手応えを、本番で100%出せることに期待したい。

10月25日に迎える結末が、3年前に立てたプランどおりになるか。40年ぶりのオリンピックの舞台へ、選手、スタッフとともに全身全霊でアジア予選に挑む。



Research!!

ライバル国を徹底分析

アジア予選にエントリーした4カ国の現状を探る

韓国

アジア最大のライバル 日本への警戒心強める

韓

国は最大の難敵と見てきた日本に、仁川アジア大会（昨年9月）決勝で29-19、第15回アジア女子選手権（今年3月、インドネシア）の1次リーグで32-20、決勝で36-22といずれも10点以上の差をつけて3連勝した。

リオへの自信を深めたのは間違いないのだが、警戒心はアジア大会前より強くなっているとされる。

2020年にオリンピックを迎える日本の意欲が、その前大会であるリオへ向け並々ならぬことを計算し尽くしているからだ。

国内リーグの日程を繰り上げ、予選までの時間をたっぷり取り、伝説的なハードトレーニング場、ソウル市郊外の泰陵選手村で鍛えてきた。

仕上げの手応えをチェックするため8月なかば、ソウルカップにフランスの有力クラブ「イッシィ・パリ」を招いて2戦、38-21、39-22と完

勝し、国内メディア、ファンに好印象を植えつけている。

この時のメンバーが名古屋へ乗り込んで来る主力なのは間違いない。

GKは朴美羅、朱嬉、朴セヨン、

CPは劉賢地、鄭地海、沈解寅、鞍

鏜姫、金温兒、権ハンナ、柳殷億、

ナム・ヨンシン、李銀美、鄭ユラ、

呉サラ、申恩珠、韓ミセル、金珍実、

ユ・セオンらだ。

このうちロンドン・オリンピック

代表は鄭(地)、沈(金温)、権、柳、李、

GK朱と7人が残る。

攻撃の主力はワールドクラスの力を誇る柳殷億（25才、180cm）をエース格にベテランの域に達している劉

賢地、鄭地海、金温兒（27才、169cm）、

権ハンナらで、なかでもロンドンを

負傷のため、不完全燃焼で終えた

金（温）の意気込みは相当なもの。

アジア選手権では得点王と好調を示した。

全員の正確な攻撃技術、一瞬を逃さぬスピードプレーは健在、主戦G

Kは朴セヨン（21才、174cm）のようだ。

昨年の世界ジュニア選手権優勝メンバーではいまのところ、ユ・セオ

ン（19才、168cm）がただ一人リスト

アップされている。



韓国・柳殷億



韓国・沈解寅



中国 序盤2日間が大きな山 大幅なメンバー刷新も

中 国陣営にとって気になる国評が耳に入る。「日韓に差をつけられているのではないか」。

第21回世界選手権（13年、セルビア）以降、確かに日韓との対戦は分が悪い。

打開を図って大会ごとにかなり大幅に選手を入れ替えている。

仁川アジア大会代表で残っている

のは趙佳芹、李曉晴、楊嬌、張海俠、武娜、吳茵、王彩ぐらいだ。

アジア選手権では王海叶、李娟とGKを一新したほか孫夢穎、韋宝柱、閻美珠や喬始千源源の20才コンビ、19才のGK楊雨柔（187cm）、18才の鎖姍姍（178cm）らを登用してきた。アジア大会組とこれらの選手によるチームはヒロシマ国際（6月）に



中国・吳茵

顔を見せ、日本戦は互いに手の内を見せず18回のタイスコアから日本が勝った。

夏のヨーロッパ強化転戦で若手がどこまで力をつけたか。序盤2日間に総力をかけ、健在をアピールしたい。

カザフスタン 4連勝中も気の抜けない ヨーロッパ型大型チーム

カ ザフスタンー日本は12年以降、日本の4戦全勝（総得点108、総失点84）。今春のアジア選手権では37-21と差をつけた。長身で押し込んでくる攻防に日本は自分のペースで試合を進められる経験がものをいっている。

11年山鹿（熊本）のアジアユース選手権でデビューしたアレキサンド

ローバ（21才、182cm、仁川アジア大会得点王）は、単身の強引な切り込みやロングの多発など力任せの面もあるが、彼女の得点をいかに抑えるかはどの国にとっても力ギである。

年末の世界選手権（デンマーク）の出場権をかけたIHFフレオフ（6月）ではバラノフスカヤ、ロディーナ、ピカローバ、GKツペンコ

ーバらベテランがアレキサンドローバを含めコロティンスカヤ、タンキナ、ポルヤンコ、16才、182cmのカルディナら若手CPを好リードしている。速攻が得意のムカノーバは姿を見せなくなった。初戦の中国戦が今大会を占うポイントだ。



カザフスタン・アレキサンドローバ

ウズベキスタン 初の五輪予選へ 若手が伸びを示す

ウ ズベキスタンのオリンピック予選出場は初めてだが、アジア女子界への初登場（97年）からは18年が経った。新興国レベルの国際大会にトップ、ジュニアともに積極的に参加、地味ながら力をつけ、12年のアジア選手権では日本に27-31と食い下がってみせた。苦手意識をつけないため、仁川アジア大会で日本は51-18と突き放している。

ムスタファエバ（28才、167cm）、190cmのカールムラトローバ、185cmのウチエーバ、180cmのゴロスコーバら大型チームを引っ張る。若手では19才のアブドウルハミドローバ（178cm）、20才のナジメディノワ（170cm）が大会ごとに伸びを示す。



ウズベキスタン・ムスタファエバ